

第 28 回企画展「クバものがたり」調査研究報告

與那覇史香(宮古島市総合博物館学芸員)

はじめに

宮古島市総合博物館では、平成 27 年 2 月 13 日(金)から 3 月 10 日(火)の期間、第 28 回企画展「クバものがたり」を開催した。本企画展では、沖縄の人々との関わりの深い植物である「クバ」に焦点をあて、クバについて植物、歴史、民俗、アートの 4 つのテーマで紹介した。本論では、これらの調査研究の成果を報告する。

1 クバとは

クバとは、ヤシ科の植物で、和名をビロウ、学名を *Livistona chinensis* (Jaq.) R. Br. ex Mart. var. *subglobosa* (Hassk.) Becc. という。沖縄では地域によってクバ、クブ、アズムサ、コバなどと呼ばれている。

幹は単幹でまっすぐと伸び、高さが 15m、直径が 30~50cm、色は灰褐色である(写真 1)。葉は、掌状のほぼ円形で、直径が 1~2m ほどある。葉身は中央まで分裂し、裂片はさらに 2 つに分かれている(写真 3)。葉柄は、長さが 1.5~1.8m、直径が 6~7cm、横断面は三角形で基部に逆向きのトゲがある。花は黄色や白色で 3~6 月に開花し不快な臭いを発する(写真 4)。実は楕円形で 9~11 月に黒色に熟する(写真 5)。種子は白色である。

『琉球植物目録』(初島・天野 1994)によると琉球列島に自生するヤシ科の植物は、次の 6 種類があり、その中にクバ(ビロウ)も含まれている。

- ①ビロウ ②オガサワラビロウ ③クロツグ ④コミノクロツグ ⑤ニッパヤシ
⑥ヤエヤマヤシ



写真 1 クバの成木
(伊平屋島)



写真 2 クバの新芽
(宮古島)



写真 3 クバの幼木
(伊平屋島)



写真 4 クバの花
(宮古島)



写真 5 クバの実
(宮古島)

2 歴史書にみられるクバ

クバについての記録は、沖縄だけでなく日本本土の歴史書にも残されている。本章では、クバについての記録がある日本及び沖縄、宮古島の歴史書を紹介する。

(1) 『古事記』に登場クバ

クバが初めて文献に出てくるのは、『古事記』と『日本書紀』である。

『古事記』(下巻、仁徳天皇)に、「阿遲摩佐能志摩」という言葉が出てくるが、この「阿遲摩佐」はビロウのことであり、「アジマサの島」とは現在の和歌山県にある友ヶ島といわれ、昔はビロウが多く生えていたと言われている。また、平安時代～室町時代にかけて、天皇や上皇、その他高位高官の乗り物であった檳榔毛車は、ビロウの葉を細かく裂き、編んで、牛車の屋根を葺いたものである(瀬川 1969)。

(2) 奈良・平安時代にも使われたクバ製うちわ

『続日本紀』の宝亀 8 年の条に「檳榔の扇十枚等を請に任せて贈り賜った」とる。宝亀 8 年は西暦 777 年なので、奈良時代にはビロウ製のうちわの存在が確認できる。

平安時代中期の『延喜式』には、「毎年の十一月向かう一箇年の料として請受ける檳榔葉二十八枚、内八枚は御飯を扇ぎさます料、他の二十枚は雑膳の火を扇ぐ料」とある(吉田 1999)。

(3) クバの献上〔宮崎県・青島〕

宮崎県の青島は、特別天然記念物に制定されたビロウの生い茂る島である。この青島のビロウが初めて文献に登場したのが、京都九条関白家に伝わる 1385 年(至徳 2 年)の絵巻物の謹写に、檳榔毛車の屋根葺きについて「日向青島より取り寄せたり」と明記されている(吉田 1999)。

(4) クバの献上〔渡嘉敷島〕

渡嘉敷島でも、琉球王府時代、クバは王府に納める上納品であったといわれている(渡嘉敷村HPより)。そのためか、渡嘉敷島には阿波連のクバ山をはじめ、その他の山々でクバを確認することができる(写真 6)。

(5) 換金されたクバ〔伊平屋島〕

聞き取り調査の記録であるが、伊平屋島では、昭和 60 年代まで沖縄本島へクバを売るために、田名のクバ山(写真 7)で日にちを設定してクバを取っていたとの記録がある(伊平屋村立歴史民俗資料館提供)。



写真6 阿波連のクバ山（渡嘉敷島）



写真7 田名のクバ山（伊平屋島）
沖縄県指定天然記念物

(6) 『おもろそうし』に登場するクバ

こば（※1）

一 百名 浦白（※2） 吹けば
 うらうらと 若君 使い
 又 我が浦は 浦白 吹けば
 又 手数は こばの花 咲きよら
 又 掻いやるは 波花 咲きよら
 〔第17巻1228〕

百名（旧玉城村）に白南風が吹くと
 和やかに若君神女をお招きしよう
 我が村に白南風が吹くと
 和やかに若君神女をお招きしよう
 船を漕ぐごとに
 クバの花が咲いているようで美しい
 櫂を掻きやるごとに
 波の花が咲いているようで美しい

※1「こば」は、植物名。ピロウ。方言名でクバという。

※2「うらしろ」は、白南風。梅雨明けの南風。

(7) 宮古のクバに関する記録

① 『球陽』に登場するクバ

『球陽』に子年飢饉（1852年）後の宮古の様子が記録されている。その中で砂川村のこととして、「この島はもともと藍草・苧麻・蕉芋・棕櫚・久場・蘇鉄等の類が少ないので、この与人は目差と相談して百姓に命令して多く植栽させた」（砂川 1997）とある。

② 『白川氏支流家譜』（小祖・十三世恵増）に登場するクバ

『白川氏支流家譜』（小祖・十三世恵増）にも子年飢饉後の宮古の嘉手苧村の様子として、「棕呂・黒ツグ・高クバのことについて、以前は植え付け高が少なく御用・自分用とも購入していたが、各家へ植え付けさせたところ成育が良く、公私の用とも不足なく充たすことができるものと思う」（砂川 1997）とある。

③宮古島におけるクバの輸出の記録

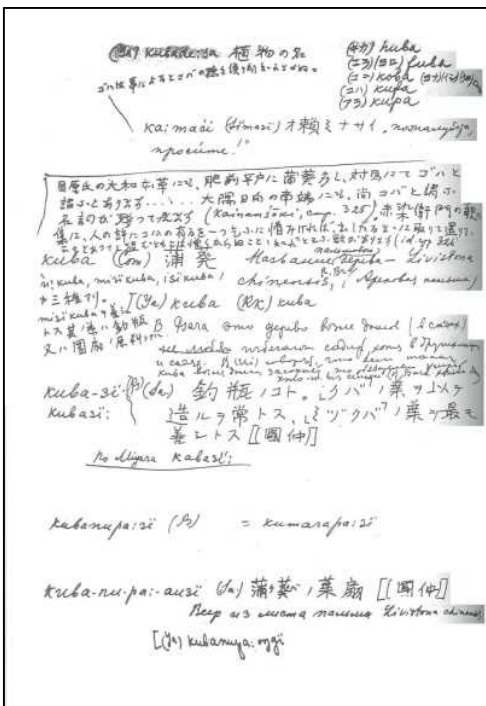
『上杉県令先島巡回日誌(宮古島之部)』には、1882(明治15)年に宮古島から「久葉団扇 5千本」が輸出され、『宮古島取調書』には、1892(明治25)年に「輸出品：コバ団扇 数量：5,243 価格：52円」(平良市史編さん委員会 1978)と記載されていることから、宮古島においてもクバが輸出されていたことが分かる。

(8)ニコライ・A・ネフスキーが残した“kuba”

ニコライ・A・ネフスキーは、ロシアの東洋学者で、宮古研究の先駆者として知られている。大正末期から昭和初期にかけて、3度にわたり宮古を訪れ、民俗、言語、歌謡などを調査し、その研究の成果を学会などに次々と発表した。そして、ネフスキーがノート(以下、ネフスキーノート)に手書きで残していた5千語の宮古方言資料は、当時宮古で使用されていた言語を知る一級の歴史資料となっている。

このネフスキーノートに、クバに関する単語がいくつか記されているので以下に挙げる。

『ニコライ・A・ネフスキー 宮古島方言ノート 複写本(上)』p.404 →



①クバに関する語彙

『ニコライ・A・ネフスキー 宮古方言ノート 複写本(上)』(平良市教育委員会 2005)の404、405 ページにクバに関する語彙がまとめられている。

(ヤ) kubade:sa 植物の名

(Ya) kubade:sa 植物の名

(キカ) huba
 (エラ) (ヨロ) fuba
 (コニ) koba (ヨナ) (イシ) (クロ) kuba
 (コハ) kufa
 (アラ) kupa

(キカ) huba
 (エラ) (ヨロ) fuba
 (コニ) koba
 (ヨナ) (イシ) (クロ) kuba
 (コハ) kufa
 (アラ) kupa

ka:maci (Simazi) 才頼ミナサイ, nomanyoga

ka:maci (Simazi) 才頼ミナサイ

ゴハは事によるとコバの聴き誤りかも知れませぬ。

貝原氏の大和本草にも、肥前平戸に蒲葵多し、対馬にてゴハと
 謂ふとあります……大隅日向の南端にも、尚、コバと謂ふ
 名詞が残って居ます (kainansōki, comp. 325) 赤染衛門の歌の
 集に、人の許にコハの有るを一つ乞ふに惜みければ、出したるまゝに、取りて還りて、
 云々とあつて「盗むとも こ(子)は憎くからぬことと知れ」と云ふ歌があります

ゴハは事によるとコバの聴き誤りかも知れませぬ。

貝原氏の大和本草にも、肥前平戸に蒲葵多し、対馬にてゴハと
 謂うとあります……大隅日向の南端にも、尚、コバと謂ふ
 名詞が残って居ます (kainansōki, c. p. 325) 赤染衛門の歌の
 集に、人の許にコハの有るを一つ乞ふに惜みければ、出したるまゝに、取りて還りて、
 云々とあつて「盗むとも こ(子)は憎くからぬことと知れ」と云ふ歌があります

kuba (Com) 蒲葵
 u:kuba, mizikuba, isikuba /
 ナ三種アリ。 [(Ya) kuba (Rk) kuba
 mizikuba ヲ善シ
 トス其ノ葉ハ釣瓶
 又ハ团扇ノ原料トナル

kuba (com) 蒲葵
 u:kuba, mizī kuba, isī kuba
 ノ三種あり [(Ya) kuba (Rk) kuba
 mizī kuba ヲ善シ
 トス其ノ葉ハ釣瓶
 又ハ团扇ノ原料トナル

kuba-zī (Ps) (Sa) 釣瓶ノコト。クバノ葉ヲ以テ
 kubasi: 造ルヲ常トス、ミヅクバノ葉ヲ最モ善シトス
 善シトス [[國仲]]

kuba-zī (Ps) (Sa) 釣瓶ノコト。「クバ」ノ葉ヲ以
 テ造ルヲ常トス、「ミヅクバ」ノ葉ヲ最モ善シトス
 【國仲】

kubanupa:zī (Ps) = kumarapa:zī

kubanupa:zī (Ps) = kumarapa:zī

kuba-nu-pa:-auzī (Sa) 蒲葵ノ葉扇 [[國仲]]

kuba-nu-pa:-auzī (Sa) 蒲葵ノ葉扇 【國仲】

kuba-gasa (Ps) (Sa) 笠ノコト。蒲葵 (kuba) ノ
 葉、sanim、菅等ニテ作ル而シテ、
 耳垂 (mim-dari) 編笠 (amgasaj)
 ノ二種アリ [[國仲]]
 [(Sa) kuba:sa (九州の南の端) kuba-gasa
 (kainansōki, 337) (カサ) (ヤマト) (ナゴ) (ヤラ) (S) (n) kuba-gasa
 (アラ) kupa:sa
 [(Ya) kuba:sa

kuba - gasa (Ps) (Sa) 笠ノコト。蒲葵 (kuba) ノ
 葉、sanim、菅等ニテ作ル而シテ、
 耳垂 (mim-dari) 編笠 (amgasaj)
 ノ二種アリ 【國仲】
 [(Ya) (イシ) (アラ) kuba:sa (九州の南の端) kuba-gasa
 (kainansōki, 337) (カサ) (ヤマト) (ナゴ) (ヤラ) (S) (n) kuba-gasa
 (アラ) kupa:sa
 [(Ya) kuba:sa

② 刑罰に関する語彙

ネフスキーノートには、刑罰に関する語彙も記されており、その中にクバの記述もみられる。また、士族や平民の刑罰に差があることも分かる(本永 2011)。

3augi: (Irav, Sa) 定木 (刑具の名) 大くばノ葉柄等ヲ以テ作り掌ヲ打チシモノ。士族限ル〔國仲〕 *Numéka quis*

3augi (Irav) (Sa) 定木 (刑具の名)。大くばノ葉柄等ヲ以テ作り掌ヲ打チシモノ。士族ニ限ル〔國仲〕

kainau-zurui (Sa) 皆納揃。毎年舊六月二十日人民悉ク集会シ租税未納者ヲ督促シ財産ヲ盡シテモ納付シ能ハザル者ヲ捕縛打擲シタル上富家ニ賣却シ奉公ヲ為サシメタリ〔國仲〕

kainau-zurui (Sa) 皆納揃。毎年旧六月二十日人民悉ク集会シ租税未納者ヲ督促シ財産ヲ盡シテモ納付シ能ハザル者ヲ捕縛打擲シタル上富家ニ売却シ奉公ヲ為サシメタリ〔國仲〕

p'itupalgi: (Sa) 磔木。人張木ノ意。大ナル二本ノ木ヲ用フ。罪人ノ四肢ヲ之レニ縛リツケ長キ鞭ヲ以テ尻ヲ打ツ。泣呼フ聲高ク低ク遂ニ絶息スレバ摺鉢ノ水ヲ飲マセテ又打ツコト往々アリキ。主ニ平民ナリキ〔國仲〕

p'itupalgi: (Sa) 磔木。「人張木」ノ意。大ナル二本ノ木ヲ用フ。罪人ノ四肢ヲ之ニ縛リツケ長キ鞭ヲ以テ尻ヲ打ツ。泣呼フ声高ク低ク遂ニ絶息スレバ摺鉢ノ水ヲ飲マセテ又打ツコト往々アリキ。主ニ平民ナリキ〔國仲〕

takivci: (Sa) 竹鞭。番所ニ出役スル平民ノ女が遅参スルヲ直立セシメテ尻ヲ數度打チタリ〔國〕

takivci (Sa) 竹鞭。番所ニ出役スル平民ノ女が遅参スルヲ直立セシメテ尻ヲ數度打チタリ〔國〕

tulna: (Sa) 捕縄。常ニ牛馬ノ網ヲ用ヒ、罪人ノ両手ヲ縛リ、木ノ枝ニ吊シ、若ハ柱ニ繫ギタリ〔國仲〕

tulna: (Sa) 捕縄。常ニ牛馬ノ網ヲ用ヒ、罪人ノ両手ヲ縛リ、木ノ枝ニ吊シ、若ハ柱ニ繫ギタリ〔國仲〕

vci: (Ps) 鞭 vci: (Ps) 鞭

u'ca: (Ps) 打ッ人 u'ca: (Ps) 打ッ人

3 暮らしの中のクバ

現在、私たちの暮らしの中には、プラスチックや金属など様々な素材の道具がある。しかし、これらの素材が一般的でなかった頃、人々は身近で手に入れられるものを利用して道具を作っていた。

特に、沖縄ではクバを使った道具を多く見ることができる。そして、これらはクバの成長過程によってその特徴を活かし、道具を作り分けていたようだ。

(1)「高クバ」と「地クバ」

クバには「高クバ」と「地クバ」があると言われており、「高クバ」は葉も大きく、幹が高く伸び、それに対して「地クバ」は、小さいもので、葉も小型で柔らかいものと考えられている。幹を使用するクバ製品は「高クバ」を使い、柄杓やクバ笠のように葉を使うのは「地クバ」が使われていたと考えられる(沖縄県開発庁沖縄総合事務局総務部 1971)。

(2)クバ製品

クバの製品は、葉から幹にいたるまで、様々な製品が作られている。例えば、葉は釣瓶や柄杓、団扇、笠、蓑などが作られ、さらに屋根や壁材にも用いられている。また幹からは、建築用材や桶、甕こしきなども作られていた。下記の表1に与那国島を中心としたクバの利用状況をまとめる(上江洲 1982 より引用作成)。

表1 クバの利用状況(与那国を中心として)

	製品名	利用部分	製作方法・用途
1	蓑	葉	葉を裂いて編んだり、重ね合わせて作る。雨具。日よけ用あり。
2	笠	葉	竹ヒゴの骨組みの上へ張る。畑用は広く、海用は小さく深く作る。雨用と日よけ用。
3	団扇	葉	おもしろをのせて作る。夏のうちわ。
4	柄杓	葉	葉の先を曲げ、葉柄に結んで作る。水甕からの水汲み。
5	釣瓶	葉	葉を円形に結んで作る。井戸から水汲み。
6	鍋	青葉	釣瓶の製作法と同じで、野良での湯沸かし。
7	食物の包装	葉	弁当包み、餅包み、塩のニガリとり、ごちそう包み等。
8	はたき	葉	葉の芯を除いたもので作る。
9	蠅たたき	葉	葉の芯を束にして作る。
10	ほうき	葉	葉の芯を束にして作る。土間用。
11	水取り	葉	立木から甕に水をとるのに使う。
12	屋根葺材	葉	重ねて屋根を葺くのに使用。
13	壁材	葉	重ね合わせて壁を作る。
14	状さし	葉	円形に作る(新案)
15	酒瓶の包装	葉	酒瓶のパッケージ(新案)
16	縄	葉	小さく裂いて縄をなう。
17		繊維	
18	縄	葉柄	日陰のクバの長い葉柄の一部を叩いてほぐし、縄にする。
19	家の材	幹	家の貫木・床板。
20	六尺棒	幹	幹をけずって棒や杖を作る。
21	こしき	幹	根幹をくって、こしきを作る。米や味噌・醤油の原料を蒸す。
22	食用	果実	蒸して食べたり、味噌の原料。
23		葉芯	葉芯を採って煮て食べる。
24	薪	幹・葉柄	幹や葉柄は薪にもできる。

(3)販売品としてのクバ製品

現在では、お土産品としてクバ笠やクバ扇が販売されている光景をよく見るが、数十年前までは日用品としてもクバ製品が販売されていた。

下記の表2に、1975(昭和50)年に沖縄全域を対象として調査された、クバ製品の出荷価格、販売価格、原材料費、1日あたりの制作個数をまとめる(沖縄開発庁沖縄総合事務客総務部1976年より引用作成)。

表2 1975(昭和50)年のクバ製品

製品名	価格(1点あたり)		原材料費 (1点あたり)	1日あたりの 制作個数
	出荷価格	販売価格		
クバ笠	400円前後	1,000円前後	82~180円	1、2個
与那国のイスカサ(海用笠)	1,500~1,600円	2,000円	280円	
クバ簍〔石垣市、与那国町〕	1,500円	2,000円	100~300円	
クバの葉ひしゃく	140円	180円	20円	4人で30個
クバ扇	35円	50~70円	10円	3人で100枚
状さし(壁掛け用書状さし)	220円	350円	56円	1人で8個

(4)食用としてのクバ

宮古では、クバを食用にしていたとする報告や聞き取りは得られなかったが、与那国島や久米島においては、クバを食べていたという報告がある。

- ①「与那国島ではクバの新芽を食べる。しかし、1本の木からわずかな量しか取ることができないため、現在ではあまり食べられなくなった。調理方法は、新芽を茹でた後、炒めて食べる。こんにゃくのような食感がする。」(聞き取り：久高島在住50代男性2014年9月)
- ②「現在でもクバの広い利用が見られるのは、与那国である。若い実は食用に供したといい、芯のなかごは最高のご馳走であった。」(上江洲 1982)
- ③「芯芽は食用に供され、美味で竹の子に似た風味があり、久米島では、屋根葺き祝いや大きな法事には、専門の採取人を手配したほどである。その芯芽を「クバのンム(芋)」と呼んだ。」(沖縄開発庁沖縄総合事務局総務部 1976)
- ④クバの実について与那国島では、「蒸して食べたり、味噌の原料」(上江洲 1982)とある。



写真8 新築祝いの祝膳(伊平屋島)
(伊平屋村 2004年より)

⑤大きなクバの葉は、お弁当包みや餅包み、塩のにがりとりごちそう包み、お膳、酒瓶のパッケージなど食物の包装にも用いられていた（写真8）。

(5)海外でのクバの使用例

①フィリピンでは、クバをアナハウ（Anahaw：タガログ語）と呼び、特に原住民（Indigenous people）は、魔除けとして家の入口にかけている（写真9）。また、クバの幹の繊維を用いた織物があり、さらにクバの葉で屋根を葺き（写真10）、壁材（写真11）としてもクバを使用している。



写真9 魔除けのアナハウ
（撮影：小川 京子 氏）



写真10 クバの屋根
（撮影：小川 京子 氏）



写真11 クバの屋根と壁
（撮影：新城 卓 氏）

②インドネシアのレンバタ島では、クバの葉を編んで捕鯨船の帆にするという民族例がある（聞き取り：小川京子氏）。渡嘉敷島にも、サバニの帆にクバを利用していたという話があるが（渡嘉敷村HPより）、出所が定かでない。しかし、インドネシアの例を考えると、渡嘉敷島でもクバを利用していた可能性はあるのではないだろうか。

4 クバが登場する民話・伝説

沖縄各地には、クバが登場する民話や伝説が数多く残されており、クバは神との繋がりや特別な力がやどる植物として描かれている。

(1)漲水御嶽

「神社境内に久葉の老樹が数株植えてあるが、これは二神（古意角・姑依玉）が島内の悪魔を退治し、それまで島内の人民を苦しめていた鬼を搦め捕って黄泉国に追放した時に植えられたものだと言い伝えられていて、もし漲水御嶽神社の久葉が枯れたら鬼が現れるであろうと民間に言い伝えられている」（稲村 1972）



写真12 漲水御嶽のクバ

(2)盛加神

「盛加神は、よよかげの久場の葉(真直なクバの葉の意)で鬼どもを包み、天の立矛で天の御国へ突き上げ給ふた。それ以来、島内には悪い者は居なくなったといふ。此の故を以て、古意角・姑依玉を齋き祀る漲水御嶽には今日に至る迄クバが生ひ茂り、若し枯れるやうなことがあると鬼共が降りて来ると言い傳へられてゐる」(慶世村 1976)

(3)神のきねと鬼のきね

んきゃーんつあ(昔ね)、城辺の七又という村の女が、一所懸命織った上布を売りに平良へ歩いて出かけました。いろいろと用事を済ませ、帰ろうとするともう辺りは暗くなりかけていました。「急がなくっちゃ」女は焦って足早に歩きはじめました。

必死に歩いて村の近くまで来ると、ぽっと明かりが一つ見えました。女はほっとした途端に疲れがでてきました。「ごめんください、少し休ませてください。」中から大男が現れ、「良いところへ来た、この火の番をしておれ」と言って外へ出て行きました。

家の中には、何やら大きな鍋がぐつぐつ言っています。女は、何だろう、と蓋をそった開けてみました。「ギャー」何と人の手や足が煮えたぎっています。しまった、ここは鬼の家だったのかと思って逃げようとしたところへ、鬼が帰ってきました。「おまえ見たなー、食ってやるー」。女は捕まえられ、ひもでぐるぐる巻かれて家の隅に投げ飛ばされました。女はどうやってここから抜けだそうかと、いろいろ考えた末、「便所にいきなさい」と叫びました。鬼はひもをつけたまま、外にある便所に行かせました。そして、「まだかー」ぐいとひもを引っ張るのです。女は「まだまだ」と言いながらひもをほどき、近くにあったピンク(ハマユウ)に括りつけ逃げ出しました。気がついた鬼は追いかけてきました。女は御嶽に逃げ込み、神様に助けを求めました。「ここに女が来たはずだ！早く出せー」鬼がわめいています。神様は「女が欲しけりゃ、わしと賭けをしよう。長い石を放り投げ、わしの石が立ったらおもえの首をもらうぞ。そのかわり、おまえの石が立ったら女を渡そう」。

勝負は神様にありました。「約束だ、おまえの首をもらうぞ」と言って、鬼の頭を切りおとし、クバの葉に包むと「宮古のクバが青々と生えているうちは、降りてくるなー」と言って、空高く天に放りました。

それで今でも、鬼は天から下をのぞいてクバの木が枯れるのを今か、今かと待っているのだそうです(宮古民話の会 1986)。



写真 13 鬼の杵・神の杵(城辺七又)

(4)二月カジマヤーの話(与那国島)

昔、病気で失明してしまった母親と、その息子夫婦が暮らしていた。

母親は嫁の世話になって暮らしていたが、このような生活が長く続き、嫁は親に対する気持ちがだんだん変わっていく。そして、母親のおかずにミミズを炊いたものを毎日食べさせていた。しかし、これに母親の娘が気づき、母に教える。

数日後、母は息子夫婦に「ニチヌチマ(北の島)に宝物を埋めた」と話す。欲深い息子夫婦は大喜びで2月に船をニチヌチマに向けて出航した。そして、航海中に、母は用意しておいたクバの葉の扇で呪いながら、ニチヌチマに向かって扇を振る。すると、今まで快晴だった天気、急変し大風が吹き、息子夫婦は大波にのまれて海のもくずとなった。それ以来、2月がくるときまってカジマヤーが吹くようになったといわれている(与那国町文化財調査委員会 1978)。

(5)クバ山とクバの神(伊平屋島)

伊平屋島の北東端に、田名のクバ山というクバの密生する岬がある。このクバ山には、クバ主という神が天から降りてきて、伊平屋島で生活し、島作りが始まったという伝説がある(遠藤 2001)。



写真 14 田名のクバ山(伊平屋島)

5 クバが使われる祭祀・行事

(1)宮古の例

①ユークイ〔池間島〕

かつて、池間島のナナムイ(オハルズ御嶽)では、ユークイの際に神女がクバの葉を座布団として使っていた(写真 15)。しかし、現在ではクバの木が高くなり、葉を取ることができないため、そのまま座っている(聞き取り：池間島在住、女性)。

②リュウグウニガイ〔上野宮国〕

「かつてクバの葉をサバニに見立てて、米、酒、ご馳走をのせ、海岸から竜宮の門まで流していたが、近年では、クバの葉が手に入りにくいということもあり、木箱を作り代用している。」

(聞き取り：宮国在住、女性)

③ムルン(虫送り)〔上野宮国〕

「潮が引きはじめる頃、牛、馬、家畜をウフマ(大浜)に連れていき、家畜が病気にならないように祈る。作物につく害虫を集



写真 15 ユークイの様子
(佐渡山 1991年)
(撮影：佐渡山安公)

めて焼き、クバの葉で舟を作り、これに乗せて海に流し、害虫がつかないように祈願する。」(佐渡山 2000)

④豊年祭〔新里〕、マストリヤー〔野原〕

女踊りの際にクバ扇が使われているのを確認できる(上野村役場 1998)。

⑤6月ヤフダミ〔下地川満〕

川満の厄払いの祭祀。クバの葉柄で舟を作り(写真16)、その上に段ボールをのせ供物を入れ、海に流す(写真17)。



写真16 供物に乗せたクバの舟
(提供：佐藤宣子氏)



写真17 クバの舟を海に流す様子
(提供：佐藤宣子氏)

⑥池の御嶽の祭事〔下地与那覇〕

「部落のすべての祭祀は旧11月におわる。祭の最終日にはツカサたちがこのお嶽で神事を行ったあとここを引きあげる。そのときは、クバの葉を根っこから切りとって、それを杖代わりにしてトマイお嶽までの間をウルウルと声をあげながら歩くという」(仲間1980)。

(2)久高島の例

神の島と伝えられている久高島では、フボー御嶽をはじめ、クバの生い茂るカベール岬など島のいたる場所でクバを見ることができる(写真18)。また、クバを使った祭祀も多くある。

①イザイホー

【祭祀の内容】

12年に1度行われる、祭祀組織への加入儀礼。

【クバが使用される場面】

イザイホーの際に、籠もり場として使われるハンアシャギや七つ屋の壁一面にクバが



写真18 久高島のクバ

覆われているのを確認できる(比嘉 1990b)。

②フバワク

【祭祀の内容】

フバはビロウ、ワクは切り払うという意味で、御嶽や拝所の清掃と、一年の御願の結び的なヌル司祭の神女たちのまつり。

【クバが使用される場面】

フバワクでは、神女の座にはクバが敷かれ、タルマミキの桶はクバで覆われているのを確認できる(比嘉 1989)。

③麦の初穂儀礼

【祭祀の内容】

旧一月十日すぎのミンニー(みずのえ、みずのと、きのえ、きのと)の日に行われます。旧九月ごろ麦の種まきが行われ、このまつりの行われる頃には青い穂が実っている。この青穂の時期はまだ種と考えられ、種すなわち男と概念されている。したがってこのまつりは男のまつりといわれ、男たちの健康祈願も行われる。

【クバが使用される場面】

麦の初穂儀礼では、ヌルとウメーギがクバの葉を座布団よのうに座り、クバ扇を使う姿が確認できる(比嘉 1989)。

(3)与那国島の例

与那国島では、島の至る所でクバをみることができ、クバの民具をはじめ、クバ餅や酒瓶のパッケージなど現在でもクバが多く使われている。このように、クバとの関わりが深い与那国島では、クバを使う祭祀もいくつかある。

①クブラマチリ

【祭祀の内容】

与那国島では、旧十月以後の庚申の日から 25 日間、与那国島全集落の始祖の居所を黄色の神衣に草冠を着装した司たちが巡行して行う「マチリ」という祭祀がある。

そして、このマチリは久部良集落からはじまる。ここのマチリは昔、外敵(異国人・海賊)の侵入を、大草履を海に流し、巨人国であることをアピールし、その威嚇で防いだという故事に倣って行われているという。また、漂流物寄せの願いでもあるといわれている。

【クバが使用される場面】

宴会のご馳走入れとしてクバが使用されているのが確認できる(比嘉 1992b)。

②ウラマチリ

【祭祀の内容】

クブラマチリの翌日（辛酉）早朝から行われ、東公民館が神饌の準備をする。馬牛繁盛の祈願祭でもあるといわれている。

【クバが使用される場面】

クバの葉を香炉として使う。



クバの香炉（提供：本永清氏）

6 宮古の御嶽とクバ

古くから、天高く伸びるクバは、クバは神様の依り代にされていたためという考えがあり、クバが生える御嶽が数多くある。本章では、御嶽とクバの関係について、宮古の御嶽に生えるクバの過去と現在の比較を行うため次の方法で調査を行った。表3にその成果をまとめる。

〔調査方法〕

①宮古の御嶽について書かれた文献を集め、②クバの記述がある御嶽を抜き出して調査対象とし、③調査対象御嶽に現在クバが生えているか否かを目視によって確認し、④過去と現在のクバの状況を比較した。目視調査では、幹が確認できるクバを「高木」、幹がなく葉のみ生えるクバを「幼木」とし、本数を数えた。

〔調査文献〕

- ①沖縄県教育委員会 1981年『沖縄県天然記念物調査シリーズ 第21集 沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI』
- ②沖縄自然研究会 1979年「東平安名岬の植物相の特徴 狩俣御嶽及びその周辺の植物相の特徴」『沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告書』
- ③仲間井左六 1980年『宮古お嶽集』
- ④比嘉豊光 2001年『光るナナムイの神々 沖縄・宮古島～西原～ 1997～2001』
- ⑤平良市教育委員会 1994年『平良市史 第9巻 資料編7 御嶽編』

なお、表3の「文献から確認できるクバの状況」では、①を「沖」、②を「沖自」、③を「宮」、④を「比」、⑤を「平」と略す。

〔調査者〕

小川京子、新田由佳、與那覇史香

〔留意点〕

調査文献の中には、御嶽の植生を専門にしていない調査も含まれているため、クバの記述がないとしても、必ずしもその御嶽にクバが生えていないとは限らない。

表3 宮古の御嶽に生えるクバの過去と現在の比較

No.	地区	御嶽名	文献から確認できるクバの状況	目視
1	平良池間	ナナムイ	—	イビの後方に1本、茂みの奥に3本目視で確認できた。(2014.9.21)
2	平良狩俣	狩俣御嶽	沖自：クバが確認されている。	池間大橋に向かって、右側から山に10本ほどのクバの木を確認できた。(2014.8.8)
3	平良大浦	ツカサザー	—	高木のクバを1本確認できた。(2015.1.22)
4	平良大浦	ブンミヤーのイビ(大浦)	平：掲載写真にクバの幼木が確認できる。	幼木のクバを1本確認できた。(2015.1.22)
5	平良大浦	スタヌ御嶽(下のウタキ)	平：掲載写真にクバラしき植物が確認できる。	高木のクバを4本、幼木のクバを1本確認できた。(2015.1.22)
6	平良大浦	ワービス御嶽(上のウタキ)	—	上のウタキがあると思われる辺りに、クバを2本確認できた。(2015.1.22)
7	平良西原	ウハルジ御嶽	平：「一本のクバの木とコンクリート造りの小さな祠がある。」 沖：クバが確認されている。 比：クバの幼木が確認できる。	数本の高木を確認できた。(2014年)
8	平良久貝	ウプドマーラ(大泊)御嶽	平：「御嶽は高いクバやガジュマルの老木で覆われるようにある。」 宮：写真で5、6本のクバを確認できる。	高木のクバを10本以上と、クバの幼木を確認できた。(2014.10.31)
9	平良松原	カーニ御嶽	沖：クバが確認されている。	未確認
10	平良松原	トガムヤー御嶽	—	クバの高木を数本確認できた。(2015年)
11	平良荷川取	ムトゥ御嶽	宮：写真で1本のクバを確認できる。また文中に、「境内にはクバの木が3本はえているが、これはカネドノシュウが植えたとの伝えがある。」と記載されている。	未確認
12	平良西仲宗根	マダマ(真玉)御嶽	平：「・・・クバなどが植栽されている。」	高木のクバを数本確認できた。(2014年)
13	平良西添道	ンマヌバ御嶽	沖：クバが確認されている。	未確認
14	平良西里	漲水御嶽	平：「クバの大木が生い茂る石垣で囲われた・・・」と記載されている。	高木のクバを1本、幼木のクバを1本確認できた。(2014.12.24)

No.	地区	御嶽名	文献から確認できるクバの状況	目視
15	平良西里	住屋御嶽	平：「フクギ、アカギ、クバの大木がほぼ等間隔に生い茂った・・・」	高木のクバを数本確認できた。(2014年)
16	平良西里	ウプガフ御嶽	—	数本のクバの幼木を確認できた。(2014年)
17	平良西里	シシナム(尻並)御嶽	平：「ガジュマルとクバの大木の間・・・」	高木のクバを数本確認できた。(2014年)
18	平良西里	アツママー(阿津真間)御嶽	平：「クバやフクギ、アコウ、ガジュマル等の大木が鬱蒼と生い茂り・・・」 宮：写真で1本のクバを確認できる。	数mのクバを数本確認できるが、数年前に20本ほどクバの木が倒されたとのこと。
19	平良下里	里御嶽(神屋)	平：「クバの木やほかの樹木が茂り・・・」	高木のクバを数本、幼木を数本確認できる。(2014年)
20	下里	神屋御嶽	—	高木のクバを数本、幼木を数本確認できた。(2014.1.14)
21	城辺友利	キス°キヤームトゥ(金志川御嶽)	—	高木のクバを1本確認できた。(2015.1.16)
22	城辺砂川	マイウイピヤームトゥ	—	未確認
23	城辺砂川	クスウイピヤームトゥ	—	未確認
24	城辺砂川	ウイウスムトゥ	—	未確認
25	城辺下里添南区	パルガー御嶽	平：写真にクバラしき植物あり。	高木のクバ2本、背の低いクバ3本が確認できた。(2015.1.16)
26	城辺下里添北区	ブンミヤー御嶽	平：写真にクバラしき植物あり。	未確認
27	下里添北区	ウザンミ御嶽	沖：掲載写真にビロウを確認できる。	確認できなかった。(2015.1.16)
28	城辺七又	御嶽名不明	沖：「ビロウがそびえ」	御嶽の周辺に高木が並び、イビの横に幼木が1本確認できた。(2015.1.16)
29	城辺保良	タキナカ御嶽		確認できなかった。(2015.1.16)
30	下地上地	ウキスパイ御嶽	平：掲載写真にクバが写っている。	写真の位置にクバを確認できなかった。(2015.1.21)
31	下地洲鎌	ツヌジ御嶽	—	確認できなかった。
32	下地洲鎌	ミルクティン	平：「クバの木が目につく。」	高木のクバを7本、幼木を数本確認できた。(2014.8.29)
33	下地洲鎌	マヤー御嶽(真屋)	宮：写真で1本のクバの幼木を確認できる。	高木のクバを10本、幼木を数本確認できた。(2014年)
34	下地与那覇	イスカキ御嶽(石垣御嶽)	平：「ビロウ樹が三本そそり立つ・・・」	高木のクバを3本確認できた。(2015.2.7)

No.	地区	御嶽名	文献から確認できるクバの状況	目視
35	下地与那覇	サータ御嶽	平：「周囲八十センチばりのピロウとリュウキュウコクタンのお木があり、・・・」	高木のクバを1本確認できた。(2015. 2. 7)
36	下地与那覇	トゥマイ御嶽(泊御嶽)	沖：ピロウが確認されている。	高木のクバを2本、確認できた。(2014. 12. 2)
37	下地与那覇	マイヤマ御嶽(前山御嶽)	沖：ピロウが確認されている。	未確認
38	下地与那覇	イキの御嶽(池の御嶽)	宮：「クバの葉を根っこから切りとって、それを杖代わりにしてトマイお嶽までの間をウルウルと声をあげながら歩くという。」と記載されている。	杜の中に高木のクバを1本確認できた。(2014. 12. 3)
39	下地嘉手苅	ンマウビャウ御嶽	平：写真にクバラしき植物あり。	クバを確認できなかった。(2015. 2. 7)
40	上野新里	ンマティダ御嶽	平：写真にクバラしき植物あり。	高木のクバを1本確認できた。(2015. 2. 1)
41	上野新里	イケマヤー(池間屋)御嶽	平：「クバの木、ガジュマルのお木、センダン、ユウナ等の木々が茂り・・・」	高木のクバを7本、幼木のクバを4本確認できた。(2015. 2. 1)
42	上野野原	ウプタキ御嶽	沖：クバが確認されている。	イビの後方に高木3本、背の低いクバを2本、周辺の茂みの中に高木2本が確認できた。(2015. 1. 20)
43	上野野原	ナカ(中)御嶽	沖：クバが確認されている。	工事のため確認できなかった。(2015. 1. 20)
44	上野野原	イス。(西)御嶽	—	高木のクバを2本、確認できた。(2015. 1. 20)
45	上野野原	カーニザ御嶽	—	高木のクバ3本、背の低いクバ2本が確認できた。(2015. 1. 20)
46	上野野原	バサナカ御嶽	—	高木のクバを2本、確認できた。(2015. 1. 20)
47	上野名加山	富盛家の御嶽	平：「クバ・フクギ・テリハボク・クロツグなどの樹木が茂り・・・」	高木のクバを6本、幼木のクバを1本確認できた。(2015. 2. 1)
48	上野大嶺	大嶺家の御嶽	平：「クバ・シマヤマヒハツなどの草木が茂り・・・」	高木のクバを4本、幼木のクバを1本確認できた。(2015. 2. 1)
49	伊良部仲地	仲地中取御嶽	沖：クバが確認されている。	未確認
50	伊良部国仲	国仲御嶽	—	拝所の後方に高木2本、幼木1本を確認できた。(2014. 10. 4)
51	伊良部長浜	腕山御嶽(長浜世乞)	沖：クバが確認されている。	森に点々と高木のクバが生えているのが確認できた。(2014. 9. 19)
52	伊良部佐和田	高原御嶽(佐和田世乞・嵩平御嶽)	沖：クバが確認されている。	未確認
53	伊良部佐和田	仲御嶽(ンミガマ御嶽)	平：掲載写真にクバが写っている。	未確認

No.	地区	御嶽名	文献から確認できるクバの状況	目視
54	伊良部佐和田	黒浜御嶽	平：「特にビローの群落が発達し、最近まで10mを超すビローの高木が聳え、漁船の航海の目じるしにもなっていたが、タイワンカブトムシの食害によってかかれてしまい、現在では幼木だけが残されている。 宮：掲載されている写真で、拝所の後ろにクバを確認することができる。 沖：クバが確認されている。	拝所の後方に数本クバ（3、4mくらい）を確認することができた。森の中にも、数本飛び出るように生えるクバを確認することができた。（2014. 9. 19）
55	伊良部池間添	比屋地御嶽（豊見比屋地御嶽）	—	未確認
56	伊良部池間添	長山御嶽	—	未確認

〔クバの生息情報〕

目視調査を行っていないが、以下の4つの御嶽にクバが生えているとの情報があった。

- No.22 マイウイピヤームトゥ No.23 クスウイピヤームトゥ
No.24 ウイウスムトゥ No.56 長山御嶽

〔聞き取り〕

聞き取り調査を行った結果、以下の3つの御嶽のクバに関する情報を得られた。

No.27 ウザンミ御嶽

「以前は御嶽のわきにクバが生えていた。」（御嶽横の畑の所有者より）

No.32 ミルクティン

「小さい頃から高く伸びていた」（下地在住 70代男性）

「この御嶽の2本のクバに、馬に乗った男が降りてきたという話（伝説）を昔聞いた」（下地在住 70代女性）

No.50 国仲御嶽

「40～50年前はクバがもっと生えていた（伊良部在住・50代男性）」

「台風で根から倒れ枯れたため数が減った（50代男性、ツカサ・80代女性）」

「御嶽のクバを使う際は、願いをして取った（ツカサ・80代女性）」

「サシバを捕るための罠にクバを使った（ツカサ・80代女性）」

「クバは千の手、万の手、神の降りる場所。『八』の字の見えることから、末広がり
の象徴（ツカサ・女性 60代）」

おわりに

本企画展の調査研究では、クバに関する資料の収集からはじまり、クバの分布調査、聞き取り調査、沖縄本島周辺離島への現地調査をとおして、多くの情報を収集することができた。

その中で、クバが歴史的にも、民俗的にも、沖縄の人々にとって関わりの深い植物であることを知ることができた。

しかし、現在、私たちの暮らしの中には、かつてのようにクバを使うことはほとんど無くなってきている。その理由として、私たちの暮らしが大きく変化したことや代替品が発達したこと、そしてクバが減少していることが考えられる。クバの減少については、台風によってクバが倒れ枯れてしまったことや、タイワンカブトムシによるクバの食害などが挙げられる。御嶽のクバの分布調査の中でも、以前の調査でクバが確認されている御嶽が、現在ではクバが減少している御嶽や全く確認できなかった御嶽もあった。

また、かつてクバが使用されていた祭祀や行事も、クバの減少により採取困難になったため、クバに代わるものが使われるようになり、クバを使用する意味も忘れられかけているものもある。

だが、今でもクバが多く残る地域もある。下地与那覇には、御嶽だけでなく民家の庭にもクバが植えられている光景が何カ所か見られる。聞き取り調査の中で平良にも、「昔は家の庭や周辺にクバが生えており、クバオーギを作っていた（平良在住 70 代女性）」とあるので、与那覇には昔の風景が残されているように思われる。

現在の私たちの暮らしの中で、どのようにクバを活用することができるのだろうか。例えば、与那国島では、クバの実を使い味噌を作っていたという事例がある。本企画展の協力者である小川京子氏が、現在、クバの味噌づくりの実験をしており、これが成功したら、宮古の特産品の一つになる可能性も期待できる。さらに、この実験の際に、クバの実の茹で汁が染料になることも分かった。クバの実で染めると鮮やかな赤茶色になり、織物の染料などにも活用できると考えられる。

本企画展をとおして、宮古の皆様にも少しでもクバを意識していただければ、自然をみる目が変わり、新たな景色がみえると思う。それにより、自然との向き合いを大きく変えるきっかけとなったのであれば幸いに思う。

謝辞

本企画展を開催するにあたり、1年間かけて、資料の収集から現地視察、クバの目視調査を共におこなった小川京子さん、資料・情報の提供をしてくださいました伊平屋村歴史民俗資料館の嘉手苺知子さん、沖縄県立博物館・美術館の前田比呂也さん・大湾ゆかりさん、渡

嘉敷村教育委員会の小久保栄太郎さん、渡嘉敷村歴史民俗資料館運営委員の吉川嘉勝さん、与那国島の與那覇有羽さん、宮古島市史編さん室の佐藤宣子さん、宮古島市市史編さん委員の本永清さん、宮古島市総合博物館協議会委員の下地和宏さん、友人の新城卓さん、宮古島市総合博物館の皆様、宮古郷土史研究会の皆様、以上のほか、聞き取り調査に際しては多くの皆様に大変お世話になりました。ありがとうございました。

〔参考・引用文献〕

- 天野鉄夫 1989 『図鑑 琉球列島有用樹木誌』 有限会社沖縄出版
- 稲村賢敷 1972 『宮古島庶民史』 株式会社三一書房
- 上江洲均 1973 『沖縄の民具』（考古民俗叢書 12）慶友社
- 1982 『沖縄の暮らしと民具』（考古民俗叢書 19）宮嶋秀
- 上野村役場 1998 『写真集 上野 暮らしの移り変わり』
沖縄県開発庁沖縄総合事務局総務部
- 1971 『沖縄県民具・民芸品実態調査報告書』
沖縄県教育委員会
- 1981 『沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI』（沖縄県天然記念物調査シリーズ第
21集）
- 沖縄自然研究会
- 1979 「東平安名岬の植物相の特徴 狩俣御嶽及びその周辺の植物相の特徴」
『沖縄県自然環境保全地域指定候補地学術調査報告書』
- 慶世村恒仁 1976 『宮古史伝』 吉村玄得
- 遠藤庄治 2001 『伊平屋村民話集』 伊平屋村教育委員会
- 佐渡山安公 1991 『夜語り』 かたりべ出版
- 2000 『上野村の御嶽～伝承と祭祀～』
- 下地祥介 1998 『宮古島の民具』 ぐしけん印刷
- 砂川玄正 1997 「子年飢饉の後で」『平良市総合博物館紀要 第4号』 平良市総合博物館
- 瀬川弥太郎 1969 『観葉植物』（下巻 椰子及び観・棕櫚竹編） 加島書店
- 平良喜代志著
- 1987 『沖縄の樹木』 新里孝和監修 新星図書出版（株）
- 仲間井左六 1980 『宮古お嶽集』 近代情報
- 日本民具学会編

- 1997 『日本民具辞典』 株式会社ぎょうせい
初島住彦・天野鉄夫
- 1994 『琉球植物目録』 沖縄生物学会
- 比嘉豊光 2001 『光るナナムイの神々 沖縄・宮古島～西原～ 1997～2001』
(チルチンびとライブラリー②)有限会社風土社
- 比嘉康雄 1989 『神々の古層①』(女が男を守るクニ〔久高島の年中行事Ⅰ〕)ニライ社
p. 14, 15, 21, 58, 61
- 1990a 『神々の古層④』(来訪する鬼〔パーントゥ・宮古島〕)ニライ社
- 1990b 『神々の古層⑤』(主婦が神になる刻〔イザイホー・久高島〕)ニライ社
p. 100
- 1991a 『神々の古層③』(遊行する祖先神〔ウヤガン・宮古島〕)ニライ社
- 1991b 『神々の古層⑦』(来訪するギレーの神〔シマノーシ・渡嘉敷島〕)
ニライ社
- 1991c 『神々の古層⑧』(異界の神ヤガンの来訪〔ヤガンウユミ・粟国島〕)
ニライ社
- 1992a 『神々の古層⑥』(来訪するマユの神〔マユンガナシー・石垣島〕)
ニライ社
- 1992b 『神々の古層⑫』(巡行する神司たち〔マチリ・与那国島〕)ニライ社
p. 16
- 平良市教育委員会
- 2005 『ニコライ・A・ネフスキー方言ノート 複写本(上)』
『ニコライ・A・ネフスキー方言ノート 複写本(下)』
- 平良市史編さん委員会
- 1978 『平良市史 第4巻 資料編2 近代資料編』平良市教育委員会
- 1994 『平良市史 第9巻 資料編7 御嶽編』平良市教育委員会
- 民話の会 1986 『みやこのみんなわ』(民話テレホンサービスハンドブック)がじゅまる印刷
- 本永清 2010 「ロシアの東洋学者ニコライ・A・ネフスキーが書き遺したもの 人頭税
関連語彙」『沖縄文化』(第44巻2号 108)
- 与那国町文化財調査委員会
- 1978 『与那国島の民話集』与那国町教育委員会
- 渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也
- 2008 『沖縄民俗辞典』株式会社吉川弘文館